

## 集学的治療が奏功した HER2 陽性胃癌脳転移の 1 例

まつ ばら たけし ひら はら のり ゆき  
 松 原 毅 平 原 典 幸  
 く もり こう じ た じま よし つぐ  
 久 守 孝 司 田 島 義 証

キーワード：HER2 陽性胃癌，脳転移

### 要 旨

進行再発胃癌に対する化学療法はめざましい進歩を遂げた。ToGA 試験により胃癌初の分子標的薬としてトラスツズマブが臨床導入され、さらなる予後向上が期待される。その一方で各種癌の治療成績の向上に伴い、転移性脳腫瘍に遭遇する機会が増加している。現在では癌患者の 9 %前後に脳転移がみられ、剖検による脳転移の発見率は20-30%とされる。一方、胃癌の脳転移は 1 %以下と極めて稀で、他の部位への転移病巣を伴うことが多い。予後は不良で生存期間中央値は数ヶ月程度であるが、直接死因の多くは原発巣の病態増悪に起因するとされ、全身的な治療効果が予後を左右する。従って、脳転移症例では、頭蓋内圧亢進症状や髄膜癌腫症状などによる急激な全身状態の悪化や PS の低下を防ぎ、脳転移自体によって QOL や予後が左右されることのないようにコントロールすることが肝要である。

### はじめに

近年の癌治療成績の向上に伴い転移性脳腫瘍の頻度が増加し、現在では癌患者の 9 %前後に脳転移がみられる。剖検による脳転移の発見率は20-30%と報告されている<sup>1)</sup>。胃癌の脳転移は 1 %以下と極めて稀であるが<sup>2)</sup>、有効な治療法は確立されておらず、手術療法、放射線治療、化学療法が単独あるいは集学的治療として施行されているの

が現状である。今回われわれは HER2 陽性胃癌脳転移症例を経験したので文献的考察を加えて報告する。

### 症 例

症例：68歳男性  
 主訴：通過障害  
 現病歴：2010年通過障害を主訴に来院。精査の結果、胃上部に 2 型の腫瘍性病変を認めた。同時に、肝左葉に多発性の転移巣を認め、 pT2N1H1 P0CY0M0 pStage IV (胃癌取り扱い規約第13版) と診断した。治療切除不能な進行胃癌であったが、

Takeshi MATSUBARA et al.  
 島根大学医学部消化器・総合外科  
 連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1